

留学体験記

開発システム工学科 4 年

町田和俊

留学先: National University of Singapore

期間: 2008/8/6-12/4

1、初めに

私は 2008 年 8 月～12 月までの約 5 ヶ月間(授業は 4 ヶ月間)、シンガポール国立大学(NUS)に交換留学する機会を得た。今回は、その留学期間の前後も含めた体験記を残すことによって、自分の考えの整理をし、さらにそれが今これを読まれているみなさんの留学の参考になればと思う。ここでは、自分で調べられるようなことは極力避け、もっと根本的な部分についての私の意見なども含めて、みなさんの今後の判断材料となるような文章を書いたつもりである。それゆえ、自分の価値観や他の方の体験記などとよく比較して、この文章はあくまで一つの意見として参考にさせていただければと思う。

2、なぜ学部での交換留学なのか？

・ ある傾向

まず、一つの傾向を知っていただきたい。東工大における派遣交換留学生は圧倒的に大学院生が多いということだ。留学生課の発行するブックレットや、各イベントに出てくるのはほとんど大学院生ばかり。留学生課の方の話によれば、学部生は交換留学生のうち 07 年度で 10%強しかいないそうだ。あとは、ほとんど学部 4 年生で応募して修士 1 年のときに 1 年くらい留学、というパターンらしい。かく言う私もその選択肢を一瞬考えたが、すぐにベストな選択ではないと思った。

理由は 2 つ。1 つは、これから全く新しい環境に自分を投げ出して、自分の価値観を変えてしまうかもしれない(それで専門すら変わり得るし、勉強なんかやめて早く学部卒で就職しようという風にだってなり得る)体験をしようとしているのに、修士の進学先を決めてから(恐らく大抵の場合 4 年のときと同じ研究室なのだろうが)行くというのは何かおかしいのではないかということ。もう一つは、仮に自分の興味・関心に変化しても、自分の専門は変えないものだと仮定して、なぜ東工大での研究を中断して海外に行かなければならないのか、それは研究が中途半端になってしまうのではないかということである。また、もし「どうしてもその留学先のある研究室で研究したい」というのなら、どうしてその大学院に初めから進学して、修士課程の全てをお望みの研究室で過ごさないのか、ということである。

これには、欧米の大学と日本の大学の学部での教養教育の捉え方の違いが関係しているように思う。日本の大学は、「もう専門というのは大学に入ったときから 1 つに決まっていて、社会に出る前に専門バカにならないようにちゃんと教養もつけときなさいよ」という感じではないだろうか。しかし、欧米の大学なら「学部 3 年くらいまでは、とりあえずメジャー(主専攻)とマイナー(副専攻)を決めてそこを重点的にやりつつも、他の興味のある分野も幅広く勉強する。それであなたに本当に合った専門を見つけなさいよ」といった捉え方をしているというのが私

の認識である。ノーベル賞受賞者の小柴昌俊さんがよく言われることを引き合いにだすなら、「どんなに勉強しても苦にならないこと、自分が本当に好きなこと」—それを見つけさせることが学部教育の大きな目的の一つなのではないか？

その点、東工大は大学院教育重視を標榜していて、修士まで含めた6年間というのを理系の専門教育として当たり前のように捉えており、学生もその流れに素直に従って東工大の同じ研究室に修士までいるということが多いように感じる。もちろん実験の多い研究室の場合は4年の所属研究室と同じ研究室に続けて修士課程でも所属することは、専門的な教育として利点があることは理解しているが、他の大学院がいいのであれば別にそっちに行っていっていいし、途上国のほとんどの学生が学部卒で就職するようにさっさと就職してしまってもいいのである。周りの人がそうだからといって、それは日本の閉鎖的な社会においてそうであるのであって、世界的に見たらそうでもないものであり、きちんと現状を理解して周りの人に流されずに判断するべきである。少なくとも選択肢が東工大だけで、海外の大学は考えもしないというのではもったいない気がしてならない。

・ 私の場合の理由

ここまでで、一般的な傾向に対する私の意見を述べた。既に、「なぜ交換留学するのか？」に対する私の回答がある程度お分かりかと思うが、これからそれをもう少し詳しく書きたい。私の場合は、留学前、一通り自分の専門である化学工学(＋いくらかの開発の授業)の3年までのカリキュラムを終えた段階であった。しかし、それまでに、私は周りの友達と比較してあまりに専門の成績が悪かったので、「本当にこの専門は自分にあっているのか？」と感ずることがよくあり、一方で別のある授業(自分の興味・関心のみ(単位の取りやすさではなく!)で選んだ授業)では、時間を忘れて知的好奇心の趣くままにその勉強に没頭できたのだった。

そういうことを踏まえ、私のこの留学のねらいの一つは、今の専門(基本的には化学工学)が本当に自分にあっているのか、違うなら他のどの分野が本当にやりたいのか、それを探り、大学院でどこに進学するか確信を得たかったとうことである。また、一度英語圏での留学経験を得ることで、海外の大学院に進学することのハードルを下げようという意図もあった(日本の大学の授業の雰囲気は昔からあまり好きではなかった)。

以上のような理由で私は学部で交換留学することにしたのである。そして、少しでも私と同じようなことを考えた人がいるなら、学部で交換留学することを強くお勧めする。

3、卒業は延ばすべきか、延ばさざるべきか？

ここで、一つの懸念がある。学部生は授業のだいたいのカリキュラムが決まっており、学期のスタート次期が異なる海外の大学への留学の時間を作りづらいということだ。例えば、もし学部の卒業を延ばしたくないというなら、3年前期までにほとんどの単位をとり終えて3年後期に1学期留学し、必修の実験だけどうにか互換するという感じである。1年間留学したいとなれば、かなり早い段階から単位互換や学期のスケジュールのズレなどを考慮して準備する必要がある。単位互換の協定などが現在進行で進んでいるから、年々環境は整ってきてはいるが、まだまだ難しいところもあるだろう。

しかし、その調整などの煩雑さを理由に留学を敬遠するなら、思い切って卒業を1年延ばすのも手である。もし家庭の経済状況が許すのならば、1年くらい卒業を延ばしたところで大損することはないし、長い人生を考えたら、この感受性豊かな学部の時代に1年長くモラトリアム期間をもらって大いに進路を考えたいほうがきっといい人生を送れるのではないだろうか。今回の私の例について言えば、卒業を1年延ばして、行く前は英語の勉強、留学前後には旅行、日本に帰ってきてからはNGOでのインターンをした。このように、いくらでも個々人に合った有意義な過ごし方ができると私は思う。

日本を含めて受験競争が激しい国(特にアジア諸国)では、大学に入るまでに学生が日々の成績に追われて学問探求の心を持つことは難しいし、日本なら成績によって親や先生に進学する大学を(日本の中で)勧められ、生徒もそれに従う。そうすると自分の本当にやりたいことは何なのかとか、自分のいる環境がベストなのかとかいうことを考える機会があまりない。比較的経済的な余裕があり、兵役義務などで若い時間を何年か犠牲にすることもない日本人が、なぜそんなに生き急ぐ必要があるのか。

従って、経済状況が許し(東工大は派遣交換留学用の奨学金の基金があり、私のように月8万円の奨学金をもらうチャンスが十分あることも覚えておいてほしい(数年前には余ってさえいたらしい))、また浪人で余分に何年か人生経験がある人などを除けば、日本の大学生は1年くらい余分にもっとじっくり自分の本当にやりたいことを探す方がむしろ賢明なのではないだろうか。

4、なぜシンガポールだったのか？

次に、留学先を選ぶときのアドバイスをいくつか書いておく。「なぜ留学するのか」と同様に、「なぜそこに留学するのか」も明確にしなければ実りある留学体験は得られないだろう。もちろん、留学も旅行と同様ある程度の不確実な部分がいい経験となる(予想外のトラブル、知らなかったことを知る)のはもちろんであるが、明確な目的意識というのは不可欠だろう。

例えば私のシンガポールの例で言えば、理由は主に3つある。

1つは、よく考えずにアメリカなどを安易に選ぶのではなく、アジアの先進国の日本人として、まずアジアを知りたかったということである。今後、中国・インドを筆頭にアジアは世界の経済成長の中心となることは間違いないし、国際政治においてもますますその存在感が増していくはずである。従って、旅行や、留学などを通してこの地域を熟知しておくこと、また多くの友人を得ておくことは、間違いなく将来の自分の武器になると考えていた。さらにいえば、開発問題に興味のある私としては、アジアの成長例をよく理解しておくことは、将来この



Singaporeans watching Premier League at a food court
- This Is Asia!

問題の中心であるアフリカの開発に携わるときにも必ず役に立つと思っていた。その点、シンガポールはアジアから学生が集まる場所であり、また東南アジアを旅行するには絶好のロケー

ションでもあるため、初めての留学先の最有力候補だった。

2 つ目は、強いなまりがあるとはいえ、れっきとした英語圏であり、英語圏の大学院に進学することが苦にならないレベルの、実践的な英語を身につけることが出来ると考えたからである。実際、行ってみて中国系、マレー系、インド系、欧米人などの話す英語はそれぞれ独特のなまりがあるが、それらを聞くことによって、アメリカ人やイギリス人の話す英語だけが英語ではないということ、身をもって学べたと思っている。

3 つ目は、シンガポールが日本とかなり違う国であるということだ。中国系、マレー系、インド系の人々が他民族国家を形成している。また都市国家であり、企業や投資を呼び込む戦略的な国家運営を政府の強いトップダウンで行っているという印象があった(シンガポールは世界銀行「ビジネスしやすい国ランキング」で1位の常連)。これは、日本と異なる環境に住むという経験がなかった自分にとって、この点でも合致していた。

以上のようなことは、全てが行く前から明快に説明できたわけではないが、直感のようなものはあった。ようは、あなたにとっての現在のベストの留学先を考えるのに、人気とか常識だけで選ぶなということである。石油危機時代にエジプトに留学した衆議院議員の小池百合子さんのように、周りに「何でそんなところ」言われたって、自分の直感で行くくらいオリジナリティーにあふれる決断をしてみてもいいと思う。

5、何を得たのか？

留学を通して学んだことは、とてもここに書ききれぬものではないが、主だったものだけでも書いてみよう。

・ **実際に自分で体験すること**

簡単に海外の情報が日本にいても手に入る。しかし、その情報は例えばある国の断片でしかなく、その断片ですらいろんなバイアスがかかっていてどこまで真実を語っているのかは分からない。こんな時代だからこそ、逆に自分自身の体験を大切にしなければならないのではないか。唯一100%信じられるものは、自分が五感で(自分の目で見、耳で聞いて、鼻でにおいをかぎ、口で味わい、そして肌で感じる)体験したことなのだから。



ドリアンの臭いは嗅いでみないと分からない

海外のことを真に理解するには、やはり日本を出ることは不可欠だ。また、海外に出ることは日本を知ることでもある。海外に出れば嫌でも、自分が日本人ということを意識せざるを得ないからである。そして国際社会における日本の存在を考えてしまうからである。

・ **英語は最強のツールである。それ以上でもそれ以下でもない。**

英語の歴史や美しさはさておき、実質的に現在の世界の共通語は英語であり、これからもそうだろう。英語がなかったら、世界の良質な情報を素早くキャッチすることもできなけれ

ば、外人と議論することもできない。

しかし、英語がいくら役立つと言ってもそれはツールでしかない。結局、会話や議論をする(その機会を作り出す)とき問題なのは、その人の性格であり(性格は英語圏の人と付き合うことである程度変わりうると思う)、興味関心であり、背景知識であり、論理構成力・理解力なのである。例えば、ルームメイトがいくらエキサイティングな宗教の議論をしても、あなたがその背景知識があって、しかも興味を持ってその議論を聞くことが出来なければ、その議論には参加できない。やはり、英語が出来たとしても、それで語る言葉がなければ、ビジネスでもアカデミックな世界でも決して国際社会で通用しないと思う。

・ 現地人/友人の日常・本音

私は、旅行が好きだが、旅行だけではなかなか現地の人の日常生活や、その国の人の本音などを深く理解することはできないと思う。一方、留学は、ある地域に長く滞在するので、現地の人々や他の国から来ている留学生と長い時間を共に過ごし、また一緒に勉強することで深く議論するチャンスも多く、そのようなことに適している。

例えば、今回の私の場合は、シンガポールで年に一度の独立記念日を体験し、日本人とは異なる愛国心(Patriotism)を感じる事ができた。また、多民族が美しく共生していると思っていたのに、実際のところ議会での権力差や経済格差(とそれに伴う言語の問題)など種々の問題があると気づく事ができた。このように、長くいなければ決して味わえなかったことがたくさんあった。



独立記念日のイベントに集まる人々

・ 忘れられない瞬間

留学中には、いくつかの忘れられない瞬間があった。今回はそれを2つほど紹介する。

一つ目は、ある日の夜。オランダ人のルームメイト(Philosophy Major)が、「なぜ一分は60秒なんだ?」と言い始めた。それに対して、イギリス人ルームメイト(Law Major)が応酬して議論が始まった。理系学生のはしくれの私としては黙っておけないと「2と3と5で割れるからだ」という意見を主張。そこから、「どこで数学は始まったのか?」、「考えることに時間は必要なのか?」、「なぜ時間は存在するのか?」、「ビッグバンの前は何だったのか?」とか延々とした議論がオランダ人ルームメイトの主導によって展開されていった。その議論は軽く2時間は続いた。その時間はこの上もなく楽しく、恍惚感さえあった。ふと考えると、いろんな国の人と、いろんな専門の人と、とりとめもなく議論をすることは自分の一つの夢だったことを思い出した。違うバックグラウンドの人間と議論ができるとはなんと楽しくて素晴らしいことかと、この日改めて思ったのである。



ルームメイトの一人
(コリアン系オランダ人)と

もう一つの忘れられない瞬間は、シンガポール最後の日のことだ。アパートの近くのフードコートで最後の昼飯を食べているうちに、激しい雨が降り出したので、食べ終わった後もしばらく雨宿りをしていた。そのときに、漠然とこれまでのできごとを振り返り、また、早く湯船にゆっくり浸かりたいとか、うまい日本食が食べたいとかそんなことを考えていた。そして、ふと故郷の赤城山と利根川の風景を思い出して、同時に涙がぼろぼろ出てきた。今思うと、自分はある群馬の端っこの小さい村か



雨宿り

ら、こんな遠くシンガポールで半年も日本を離れて暮らしたけど、それはたぶん小さいころに自然の中でのびのびと育ててくれた親や小学校の先生たちのおかげだなと、そこが自分の原点だなと本能的に懐かしくなったのかもしれない。日本に戻り、地元に戻ってからすぐ向こうで思い出した風景を見に行ったら、山は雲がかかってあまり見えなかったし、川は昔とかなり形が変わっていたけど、やっぱり帰る場所があるって最高だなと思った。

6、終わりに

結局、留学するために一番大事なことは自分の道を見つけ、それを貫くために、群れから抜け出すこと、逸脱すること、それを乗り越える勇気だと思う。そうすればあなたは、自分の唯一無二の道へ突き抜けられるはずだ。

それから、もちろん留学はあなたの意思が大事だけれども、いろんな人のサポートが必要だ。私自身も、両親や、日本と留学先の大学の関係スタッフ、助言教員の先生、向こうの友達などのおかげで留学という大変貴重な体験を無事に終えることができた。あなたも、もし留学を志したら、最初から最後まで自分を支えてくれている人への感謝の気持ちを忘れないでください。